

イスラム・原理主義・オウム 宗教とテロルの研究

似て非なるキリスト教とイスラム教の狭間で
生じた極度の軋轢に、日本はどう応ずべきか

しまだ ひろみ

島田裕巳

宗教学者

はしづめ だいさぶろう

橋爪大三郎

東京工業大学大学院教授
社会学者

NYの惨禍の犠牲者に祈りを捧げる歴代大統領



を見て、信じがたい出来事が起こっている
と思った反面、起こるべくして起こったこ
とだという感慨も覚えました。

いろいろな言い方ができますが、一つに
は「二十一世紀はテロリズムの時代だ」と
いうことです。正面装備によって、アメリ
カなど先進国の軍事力に対抗することは、
第三世界の国々にはほぼ不可能です。日本
も憲法上は軍事力こそ持ちませんが、アメ
リカに協力する側にいる。ならば、弱者の
側に立つ人たちが自己の政治的主張を繰り
広げていくにはどうするか。一つはテロリ
ズムであり、もう一つは宗教など別個の思
想体系によって新たな信念や幻想を広げて
いく運動でしょう。この二つが結びつく可

能性は充分にあったのです。

島田 アメリカ・カリフォルニア大教授
にユルゲンスマイヤーという社会学者がい
ます。彼には『The New Cold War?』
(邦題は『ナシヨナリズムの世俗性と宗教
性』)という著書があるのですが、この問
題提起が非常に重要だと思っております。

いまの東西冷戦後の状況とは、世俗的な
ナシヨナリズムに対して宗教側が苛立ちを
覚え、それがむしろ政教一致をめざす宗教
的なナシヨナリズムとして対決する、とい
う図式を説いています。宗教的ナシヨナリ
ズムというのは原理主義と同義ですが、世
俗的ナシヨナリズムとは政教分離を徹底さ
せて国家などに対する忠誠心をいけば信仰
のような形で作り上げていくようなもので
す。アメリカをはじめとする先進国は軒並
みそうなります。この二つのナシヨナリス
ムの対立がまさに「新しい冷戦」になるの
です。

ユルゲンスマイヤーはオウム事件直後に
来日して宗教学者やジャーナリストとも話
をした人物ですが、彼のこの本での結論は
宗教的ナシヨナリズムは互いに連携をとれ
ないまま、経済的な豊かさを求めるので、
どこかで二つのナシヨナリズム間には妥協

が成立するのではないか——こういう形で
希望を見出そうとしたのですが、今回の事
件はその樂觀的な見通しを超えてしまっ
た。すでに冷戦ではなくて、実際の戦争状
態にまで事態は進んでしまったわけです
ら。

橋爪 テロが起こるならば、日本はその
ターゲットになる側です。日本の中からテ
ロリズムに参加する人間も出る可能性はあ
りますが、ターゲットになる側だと認識す
べきです。

そして、すでに私たち日本人は今回の事
件の要素をみんな経験しているのです。一
番最初は七〇年の赤軍派によるよど号ハイ
ジャック事件です。七二年には岡本公三な
どのテルアビブ乱射事件が起きましたが、
これは二十六人が殺害された無差別殺人で
す。それに七四年の三菱重工ビル爆破事件
は東アジア反日武装戦線による経済的中枢
へ向けたテロですね。最近では九五年のオ
ウム真理教による地下鉄サリン事件。霞が
関が標的になりましたので、政府中枢部へ
のアタックだといえます。こう考えると、
今回の事件の輪郭とほぼ重なります。

だから、今回、イスラムや「イスラム原
理主義」がクローズアップされています

が、これは偶然の要素だと私は思います。
ある社会のなかで思想を組み立てるとすれ
ばイスラムしかない土壌があった。そのな
かで過激な行動を正当化する運動が原理主
義しかなかったため、そういう表現を取ら
ざるをえなかった。社会的文脈が別であれ
ばマルクス主義や仏教の一分派だったかも
しれない。つまり偶然なんです。

ただし、世界的に見れば、キリスト
教・資本主義文明と、そこから相対的に取
り残された感のあるイスラム世界の間に、
こういった摩擦が起こりやすいという構図
はあると思います。

ドグマの違い

島田 オウムをずっと見ていて、サリン
事件の実行犯たちは非常に特殊なテロリス
トだったのでは、と思うんです。彼らには
テロルを行なうという意図が最初から明確
だったわけではないんです。

松本サリン事件の実行犯の裁判での証言
をみても、事の重大性や自分たちが殺人を
しようとしている認識はほとんどない。サ
リンを実際に使ったけれど、その効果につ
いての認識すら持ち合わせていない。命令

されたから実行しただけという、無意識的なテロリストだった。

ただ、地下鉄サリン事件になると実行犯は実際にサリンを教団が使用する事実を知っていたわけですから、人殺しをするという認識はありました。大半は認識はした上で迷うんです。関係のない一般の人を犠牲にすることに抵抗を感じる。ところが最後には、一般人たちは亡くなっても、その死がオウム教団を守ることになるので救済になる、と考えて納得してしまっただけです。この段階にきて、初めてテロリズムに結びつくような宗教的な論理が登場するんです。

イスラム過激派と目される実行犯たちの殉教意識というのは、オウムの実行犯とそこに至るプロセスが違います。オウムにあったのは日本社会の漠然とした混沌とか、社会に希望を見出せないというニヒリズムが引き金になったようです。

橋爪 キリスト教とイスラム教は似ていますが、また正反対の部分がある。キリスト教は弱者の運動として出発したのに対して、イスラム教はその逆だった。キリスト教は教祖イエスが殺害されてしまい、地下

に潜行して圧迫されながら勢力を徐々に拡大していった。やがて資本主義と結びつくことによって世俗と信仰を分離させて、巨大な文明を生み出した。いまや地球を支配しているともいえる成功をおさめているが、その出発点をどこかでひきずっている。

イスラム教は逆で、ムハンマドは教祖として大帝国を支配し、社会的に成功した。その帝国も長く維持されてヨーロッパ文明よりも強大な期間が長かった。にもかかわらず、資本主義社会の勃興とともに没落していった。

なぜこのような運命の違いが生じるのかといえば、ポイントは信仰の中心になるドグマ(教義)の違いだと思っただけです。

イスラム教のドグマはコーランというはっきりしたテキストにあって、コーランを忠実に守るといふやり方ですから、キリスト教徒から見れば保守的に見える。キリスト教の場合はテキストである聖書もありますが、三位一体だとか愛だとかいう解釈で信仰が成り立っているもので、世俗の行動に自由度があります。中世から資本主義社会に変わるとしても、解釈の切り換えで、科

学技術や営利企業といった世俗の活動と信仰とを両立させることができるのです。

イスラム教の場合はその調整が難しいので、相対的に弱い立場におかれてしまう。では、弱い立場から抵抗する場合、いかなる自己表現の手段があるかといえば、それはテロリズムであり、究極の形が自爆型のテロリズムなんです。自爆型は攻撃的ではありませんが、強者ではなくて弱者の手法なんです。

殉教の構図

島田 犯行声明こそ出ていませんが、今回のテロはビンラーディンを首謀者とするイスラム過激派の仕業だと考えられています。ならば、ハイジャックして貿易センタービルに衝突させた実行犯たちは、殉教者と位置付けられるはずですよ。

橋爪 そうでしょうね。

島田 この自爆テロが殉教という枠組みで解釈される。またこれはオウムとも似ていることですが、高学歴の若者が殉教することを称揚する社会状況がある。殉教自体はどの宗教にもあることです。

キリスト教でも聖人になる一つの条件ですし、日本もキリシタン禁制下では実際に殉教者を出した歴史もある。そもそもキリスト教では端緒からしてイエスが殉教です。仏教でもベトナム戦争時に僧侶が焼身自殺した例もありましたし、普遍的なことだと見ることもできます。

ただ、社会状況によっては殉教が特別な価値をもってクロウズアップされることがあるのです。

私は橋爪さんがご指摘のイスラムとキリスト教の対立という図式もあると思います。もう一つ、イランというカペルシヤ的な宗教のあり方が結構重要な意味を持っているのではないかと思っただけです。

イランでは教科書の中でも殉教を賛美する記述があったり、現実にイラン・イラク

戦争などで命を落とした人々を殉教者として讃えもする。『現代イラン』(桜井啓子著、岩波新書)では、実際の教科書の記述を引いています。中学二年の宗教の教科書にはこうあるそうです。

「神と来世を信じるものは、死を恐れな。なぜならば、死は無や消滅ではないことを知っているからである。信仰厚き者は、死とともに来世へ、あの世の素晴らしい生活へと旅立つのである」

現在あるパレスチナの殉教熱とこのイランの関係は、必ずしも明確ではありませんが、やはり影響を与えているんじゃないでしょうか。

イランは地域的に、キリスト教やユダヤ教、イスラムなどと、インドの宗教をつなぐ位置にあります。宗教学者のM・エリア

ードも『世界宗教史』で、この地域に注目しています。キリスト教の教父アウグスティヌスはもともとはマニ教というイランの宗教の信者でしたし、オウム真理教がとり入れたチベット仏教の中にもイランの影響があったと言われています。

橋爪 イスラムのテロリストと、アメリカのキリスト教文明の間に大きな亀裂があること、そして日本人——この三者の位置関係が非常に微妙になってきていると思っます。九月十一日のテロ発生直後のアメリカの反応は「ごく自然に「World War III」、つまり第三次世界大戦だ」というものでした。アメリカ国土が攻撃されたのは「パール・ハーバー以来だ」とも言われ、また航空機による自爆アタックから「カミカゼ」という名前も出てきた。

ということとは、この種の価値観のギャップと、自殺的作戦行動に対する大きな驚きが、アメリカの深い部分に体験として残っているんです。今回のテロも、それに類するものというふうに理解されている。日本人からすればサンフランシスコ講和条約から五十年たってせっかく一区切りついたところで、また昔の証文を持ち出されて迷惑な気もします。

善悪二元論

島田 イランのイスラム以前の宗教とは何かを考えた場合、善悪二元論なんです。絶対的な悪が存在して、善と常に対立関係にある。マニ教的二元論は有名ですし、この考えがチベット経由でオウムにも影響を与えたとも言えるのではないのでしょうか。善悪二元論はキリスト教世界にもありませんが、そこでは悪を異端として扱う。中世のカタリ派などもそうですが、現世に何の価値も置かなくなるので、死に向かうことが宗教の目的となるのです。飲み食いにも否定的で、儀礼も一切認めない、結果的にかなり自殺願望的になっていきます。

クリスチャンの運命観では、全てを神が取り仕切っている。だから、これに対する反駁や瀆神行為は理解できないんです。飛行機でビルに自爆することや、日本軍のカミカゼ特攻隊など想像もできません。

日本人になぜカミカゼが可能だったかといえば、自分たちが作った社会に信頼を置いていたからです。守るべき共同体があり、これが外敵に圧迫をうけた。それで、選ばれた人間が志願して、戦略目標に突っ込んだ。学徒が特攻の操縦士になったのも、イスラムの大学卒業生が操縦したのと同様、この心理です。

島田 そうですね。

橋爪 ブッシュ大統領が「これは戦争だ」と発言し、世界秩序を守るために軍事行動を起こそうとしているアメリカに、果たして心底、日本は共感できるのでしょうか。それとも、弱者の最終手段だった特攻作戦を選んだイスラムに共鳴できるのか。民主主義国家である日本はブッシュ支持を明言しますが、元来のメンタリテイからいえば、イスラムの自殺行動の方が日本人には理解しやすいはずですよ。

テロで殉教したイスラムの原理主義といわれる人たちにも、現実の世の中に対して否定的なものがあつたはずですよ。実際に殉教した人たちの遺書の中にも、現世を否定する言葉が出てくる。天国へ行くための一つの通路として殉教があり、家族内に殉教者がいることで家族全員が天国へ行けるという俗説もあるのです。

オウムの場合も、彼らが最も否定したのが現世の価値でした。これが直接オウムのテロリズムに結びついたと言いきれませんが、引き金にはなつたと思います。現実社会に対する否定的な感情があるからこそ、現実の社会を破壊してもかまわないという感覚が生まれた。

そのルーツは、やはり善悪二元論にあるのではないのでしょうか。

橋爪 ジハードを掲げての殉教でしょうが、いまの話に関しては、キリスト教とイスラム教では殉教の構造が違うような気がします。

キリスト教は善悪二元論との関係で言えば、弱い宗教なのです。宗教的コミュニティを作り出すのに成功していません。自分たちの社会が正しいと信じられない。だから、ここが私たち日本人の居心地の悪さで、政府対応の遅れや齟齬に表れています。テロから三日後、九月十四日の金曜日にワシントン大聖堂で「祈りの夜」の追悼式典が行なわれました。アメリカのみならずヨーロッパもロシアも、同じ日に行ないました。

なぜ、日本は行なわなかったのか。世界の主要国で最初に金曜日を迎えたのは日本なんです。日本は真つ先にこの機会を設けて、小泉首相なり田中外相なりが個人的にでも参列すればよかったです。そうすれば、湾岸戦争の時の轍を踏まずに済んだ。

諸外国がテロリズムに反対すると声明を出したように、日本もここでテロリズムに反対する国家であることを明確に意思表示すべきでした。

島田 日本の場合、国家と宗教との関わりには非常に微妙な問題があります。靖国神社の参拝問題もそうでしたが、この「祈りの夜」にしても国民が共通して祈る場所がない。国立の宗教施設はもちろんありません。共同で祈るとしたら、靖国神社なのか明治神宮なのか。百歩譲って場所の問題は置いておくとしても、宗教界自体がこそ

平日は世俗の場で労働をして、日曜日に教会というピュアな霊の交わりの場集まる必要がある。逆にいえば、世俗は罪にまみれてピュアではないということですよ。ここでバランスがとれればいいのでしょうか、極端になれば教会も信用できない。そこで自殺願望や、現実世界に対する攻撃性が生まれる。キリスト教では自殺禁止が強調されていますが、自己破壊願望が強いからこそではないのでしょうか。

イスラム教は反面、地上の共同体を組み合わせるのに成功しています。アッラーの教えによるイスラム法が絶対であつて、教会と共同体、つまり宗教生活と世俗の生活の区別があまりない。このイスラム共同体が外部からの攻撃などで危機を被つたらどうなるか。英雄が出現して、主体的な努力で共同体の危機から守る。これがイスラム型の殉教なんです。主体的に努力して、自殺行為であつても、神のために勇敢に突っ込んでいく。

キリスト教の場合は主体性が要求されません。敵に捕らえられて、しかし神を裏切れないので結果的に殺されてしまうのが、殉教の基本構造です。イスラム教とは明確

って祈りを捧げるという機会がなかったのは、日本の宗教的な意味での弱点だと思えます。その弱さが今回表れた。

橋爪 まさにその通りです。

宗教対立と原理主義

島田 アメリカは基本的にキリスト教社会であるとも言えますが、他の宗教に関しては非常に寛容な部分があります。キリスト教もプロテスタントが様々な派に分かれていて、カトリックもあり、イスラムもいて仏教徒もいる。宗教の正邪に関しては、はつきりした見解が社会全体で統一されていません。

橋爪 「祈りの夜」などでもそうでしたが、宗教学者たちは国民に「教会へ行きましょう」と呼びかけると同時に、「シナゴーク(ユダヤ教の礼拝堂)へ行きましょう、モスクへ、テンプルに行きましょう」と、それぞれの方法で祈りを捧げるように訴え

るんです。テロリズムに反対する限りは、全ての宗教は正統でアメリカ国民として相応しい、と。

島田 これがヨーロッパだと、支配的な宗教としてカトリックなりプロテスタントなりのキリスト教がはつきりしていて、宗教に関して正邪を決めようとする傾向がある。この点でアメリカ対ヨーロッパの宗教に関する図式的対立があつて、日本はというとその中間にいる。

アメリカ国内には、キリスト教原理主義と呼ばれる運動があり、進化論を否定したり妊娠中絶を否定するなど、時にはかなり過激な行動をとっています。アメリカ社会は実は原理主義を内包していたんです。建国の経緯からして宗教迫害から逃れて新大陸へ来ていますから、原理主義的なものは社会の周辺部ではなく中核にあるんですね。

アメリカとイスラムの対立も、その複雑なアメリカ社会の事情があつてこそ、激化してくるんだと思います。

橋爪 なぜそうなるかと言えば、キリスト教は解釈によって成り立っているからです。聖書の読み方・解釈によって宗派が分かれてくる。ただし、歴史的な経緯によつ

てヨーロッパでは何百年も安定した解釈を受け入れてきた素地があるので、社会の大きな混乱の種にはなりません。しかし排他的で保守的な面も併せ持ったため、ユダヤ人の迫害やユグノー戦争などが起こった。アメリカという国はそのアンチテーゼです。国内で信仰の違いを端を発する諍いはやめよう、世俗と宗教を分離しようとなった。

ただ、その自由度をキリスト教の範囲内に留めるかという問題があつて、次第に寛容運動が起こっています。まずユダヤ教徒がこれに加わるべきだといわれ、最近は無スリムやそれ以外の第三世界の人たちも認めるという流れがある。つまりアメリカには宗教的に外部からアクセスできる開かれた状況がある。

しかしその時に、外部からアクセスする者たちをキリスト教の側が見ると、どう見えるか。それもキリスト教内にも、聖書に忠実な原理主義者（ファンダメンタリスト）がいますが、彼らがイスラム教を見ると、自分たちと同じに見えるのです。イスラム教のうち西洋文明を受け入れたのは良いイスラム、コーランに拘りキリスト教に対する理解を示さないのは良くないイスラム。

急速に都市化した韓国では、経済成長のなかでキリスト教徒が非常に増えました。日本で創価学会に吸い寄せられたのと同じ層が、クリスチャンになった。日本ほど仏教が民衆に浸透しなかったという事情もあるでしょうが、韓国のキリスト教は日本人がイメージするキリスト教とは程遠い様式で、拝み屋さんもいればピュアな信徒もいる。

この宗教に対するアイデンティティが、世界のなかで日本だけかなり特殊な状況にあるんです。

橋爪 その特殊性がテロリズムに対する理解や反応の仕方に反映していると思えます。キリスト教文明はテロリズムに否定的な反応を示します。なかでもアメリカはとりわけ嫌悪感をむき出しにする。アメリカ人の精神的な支えは教会で、教会を中心としたコミュニティのなかで日常生活をして

いる。しかし、コミュニティ同士も社会のなかで孤立せずに互いに連関しながら、アメリカのメンバーであることを承認し合う。誰もが互いに異教徒である関係性の中で共通のルールが必要になってきた。このルールが法律です。

法律は、生命、安全、財産などセキユリティを守るために必要です。コミュニティを守る警官や消防士の勇敢な活躍も、この発想からでた行動でしょう。このセキユリティに関わる人たちのステイタスは非常に高い。

ルールを守らないアウトローやギャングたち、そしてテロリストたちへの対抗措置を講じることは正義だとされて、これを尊重する強い意思一致が生まれる——こういった構造を社会が備えています。

後者がイスラム原理主義と名付けられている。以前にイランの知識人と話した時に「イスラム教に原理主義者がいるか」と尋ねたら、それを言うなら全員原理主義者です、と予想通りの答えが返ってきた。だから、いわゆるイスラム原理主義者がテロリストになるのではなく、政治的状況がそうさせるのだ、と。この理解の方が正しいのではないのでしょうか。

日本人の宗教心

島田 アメリカは移民の国ですが、それを統合しているのはやはり宗教だと思えます。先ほどの「祈りの夜」でも、アメリカ国民は自分がどこへ祈りに行けばよいか、明確にある。日本人は、きっと途方に暮れます。移民にとっても同じかもしれません。日本への移民は、どうしたら「日本人」になれるのか。帰化手続きをとろうとも、精神的にはおそらく方法がないんです。神道や仏教に帰依しているといつても、日本人にはなれない。

結局、日本人のアイデンティティは宗教と離れてしまった。戦後の高度経済成長でずいぶん、本人が何を考えているかが、その行為を解釈する際に最大の基準になる。そうするとテロリストに、例えばハイジャック犯に同情してしまいがちになる。

テロリストに対する憎しみが人為的に感じられてしまう、日米の最大の発想の違いはここだと思えます。

島田 日本はいまだに「忠臣蔵」世界なんです。演劇化された忠臣蔵は、その心情が非常に重要で日本人の価値観を表現しています。仇討ちをした赤穂浪士は本来はルールの違反者で、テロリストだと言うこともできるかもしれません。しかし日本人は寛容に受け止めるだけではなくて、むしろもて囃す。占領軍が「仇討ち」を恐れて「忠臣蔵」の上演や上映を禁止した理由は、まさにここにあるわけです。ルールを超えている心情には至上の価値がある、というメンタリティを連綿と受け継いでいるんです。

橋爪 心情を動員することが日本の近代化に必要なものは確かですが、これは大東亜戦争で終わったことになっていました。が、じつはまだ尾を引いている。これでは心情的に貿易センタービルに突っ込んだハイジャック犯の気持ちもわかるということになりかねない。非常に難しい問題です。

しかし民主主義国家を標榜するのであれば、日本はルールを遵守する態度を示さねばならない。先進国、文明社会に対するテロを日米で連帯してやつつけよう、とメッセージを発するべきなのだが、そのかわりに、どこか対岸の火事を見るようで、たまにそこ居合わせた日本人が巻き込まれて大変だ、と。日本人が犠牲になっただけでなかったら興味すらもてないというメンタリテイではいけません。

島田 ルールの問題で言えば、なぜ人を殺してはいけないかという問いを立てたとき、その理由を見出すことはかなり難しい。生命の価値とかが言われますが、これも明確な説明にはならない。人類の社会では人が人を殺す歴史が繰り返されてきた。それで殺してはいけない、ということを押さえてきたのが宗教です。モーゼの十戒にもあるし、仏教の戒律にもある。しかし、「なぜか」という問いの答えは、戒律にも書かれていないんです。非合理ではありませんが、ルールとは一種恣意的なもので、ルールだから守るということでは成立しない。

橋爪 戦後民主主義はルールでできている、これは日本人も認識していると思いま

滅を説く宗教だという認識です。つまり、「無」というものの考え方は、日本とヨーロッパで全く違う。キリスト教世界では、救済の根拠となる魂を無化してしまうものが恐れられた。一般的にみれば間違った仏教観かもしれないが、いまの日本の相對主義的な思想状況下では、決して間違っていないと思う。

現実社会には世界中の相当数はキリスト教かイスラム教ですが、一神教の世界に生きています。日本は八百万の神といながら、崇拜の対象になるのはもっと漠然とした抽象的な神である。だから問題は、現実のテロリズムに対する防衛の面で、政治的や経済的な問題に加えて、思想的な面で、宗教思想的な面で、どう対抗するかが大きな課題です。

橋爪 キリスト教やイスラムの運動全体は組織化されていて、その中心には聖書やコーランのテキストがあり、また神学や哲学、法律があるなど、現実問題との緊張関係をつねに保っていて知的蓄積がたくさんあります。いうなれば生きた信仰です。

日本の知的伝統では、政治は文学、宗教、哲学と無縁なことがよしとされたので、知的構築物は生み出されなかった。あ

す。

構造主義やポスト・モダンの思想がありました。これは社会ごとにルールが違って、どんなルールも所詮、恣意的だということを書いていた。一種のルール相対主義であり、ニヒリズムに通じる。日本人はこれをはね除ける明確な信念を、知識人でさえもっていないのではないかと。

アメリカ人の場合は、人命の尊さや生命倫理などよりも、神の存在が大事です。だから、人殺しや戦争よりも悪いことはある、と考える。まして、戦争はある意味でルールに則った行動なので道徳的なんです。殺し手も、殺されることを覚悟しているから平等で、この意味では正義なんです。

ところが虐殺は違う。虐殺は騙し討ちで、本当のスキヤンダルです。無抵抗なインセント・シチズンを一方的に殺すのですから、神の前で釈明できない。絶対に許されないことで、戦争と対極的な位置にあるのが虐殺やテロなのです。

日本人は戦争と虐殺を区別できず、単なる人殺しと同一視してしまう。南京大虐殺といわれてもピンとこない。

島田 パール・ハーバーはどうですか。

価値観を前提にできない、中空に浮いたような状態になってしまった。自分のアイデンティティの確立が非常に難しくなるという、大きな危機がここにあるんです。

島田 日本が恵まれていたとすれば、日本語による思考形態が続いたことですが、近代化の悪影響は残りました。この影響は深刻で、つまり海外から輸入される思想や現実問題に対して受け身でいけば済んでしまった。

だから、主体的な思想的営みを作り上げてこなかったんです。昔型の西洋的な知識人は、日本は西洋に比べて遅れているで済ませてきてしまった。日本は今後はこれではいけない。

この日本社会がなぜ出来てしまったか、歴史的に検証する作業が今こそ求められている。パブルはなぜ起きたのか、そしてこれは私自身も試みましたがオウムはなぜ事件を起こしたのか——歴史的検証を重ねることで、思想にまで高めることは時間はかかるでしょうが、自分たちが経てきた道を確かめる必要があるのではないのでしょうか。

橋爪 日本人にはいろいろ誤解があるんです。イスラム原理主義はテロリズムだ、

橋爪 パール・ハーバーは軍事目標を攻撃しているのだから通常の戦争行為の範囲内。南京に比べたら遙かに罪は軽い。

島田 その議論は日本の社会にはありませんね。

橋爪 今回のテロを考える上でも大切で、テロリストの言い分は、インセント・シチズンなど存在しないということでしょう。アメリカ社会の構成員は、アメリカ帝国主義一味として全員敵である。この論理はオウムにも共通している。しかし、現実には市民社会があつて、そのセキュリティを守るために軍人などのプロの戦闘員が別個に存在する——アメリカはこの原理ですから、民間人が被害を受けたら必ず反撃します。

ファンダメンタルの国は？

島田 いま翻訳しているロジェール・ドロワ『虚無信仰』によれば、十八世紀から十九世紀にかけてヨーロッパに東洋学が生まれますが、ヨーロッパ人が仏教をどうとらえたかという点、虚無を説く宗教だと考えて、非常に恐怖したというくだりがあります。その恐怖の根源は、仏教を魂の消

だから良くない——そういう風潮があるキリスト教の原理主義（ファンダメンタルズ）も知的に遅れているというのは迷信に近い。

日本人がむしろ困っているのは、自らがファンダメンタルじゃないということですが、共通に読むべきテキストがない。共同体を組織する芯になる価値観や、確認する言葉がない。しかし、地理的条件から孤立した共同体として、何となくはなしにやってきた。歴史的経緯と偶然によって、日本という社会は成り立ってきたに過ぎない。

地球上の他の社会は、日本のような偶然の条件に恵まれなかったもので、宗教とか原理原則によって自分たちの社会を構築できた。その中で軍事的力学、政治的力学、外交的力学が発揮され、現在は跋扈するテロリズムにどう対抗するかが最新の問題になったんです。ここに日本はまだ追いついていない。組織的なテロリズムを生み出すファンダメンタルな努力が足りない。実は、テロリズムに対抗するのも、こうしたファンダメンタルな努力なんです。

二十一世紀の現在、まさにそのどちらのファンダメンタル主義につくかの分岐点なのです。